地域研究年報　**37**　2015　1–31

中山道望月宿における歴史的町並みの形成過程

磯野　巧・安村健亮・渡辺亮佑
梁　鎮武・曲　宇航

本稿では中山道望月宿の歴史的町並みの形成過程とその地域的特性について，歴史的建造物に対する所有者の保全意識や景観要素の空間分布，住民組織や行政による取り組みの分析を通して検討した．望月宿の宿構造は水害や火災によって大きく変容し，現存する歴史的建造物の多くは江戸末期以降に改築・修景されたものである．明治期以降，望月宿の歴史的町並みは生活環境や交通条件の変化により淘汰されてきたが，歴史的町並みに対する住民意識は少なからず存在し，日常生活に支障のない範囲で宿場景観が再現・維持されてきた．2000年代になると，住民組織による屋号看板設置や佐久市のまちづくり交付金事業が取り組まれ，望月宿の歴史的町並みに新たな景観要素が付加された．望月宿では歴史的町並み喪失の危機に直面しつつも，歴史的建造物の部分的な維持・管理に加えて住民組織や佐久市による新たな景観要素の創出により，新旧複合的な歴史的町並みが描かれている．
キーワード：歴史的町並み，住民意識，地域活性化，望月宿，佐久市

Ⅰ　はじめに

Ⅰ－1　研究課題

日本における大半の都市は近世に形成された町を骨格としており，これらの都市は各々の歴史的重層性を有しながら成長してきた．しかしながら，高度経済成長期を迎えると都市固有の歴史的価値や地域性が矯小化され，都市の近代化が志向されるようになった（大島，2004）．こうした状況下，近代化にともなう都市の変貌から歴史的環境を守ろうとする機運が全国で高まり，1960年代末になると長野県南木曽町妻籠宿や岡山県倉敷市などで町並み保全運動が展開するようになった．1975年には文化財保護法が改正され，文化財の定義の中に「周囲の環境と一帯をなして歴史的風致を形成している伝統的建物群で価値が高いもの」が加えられた[1]．とりわけ「重要伝統的建造物群保存地区」制度の導入を経て，町並み保全運動はアカデミズムや行政，地域住民といった多様な主体の意図が連関するものとなった（福田，1996）．その後，1978年には「全国町並みゼミ[2]」が設立され，1980年代頃より自治体も町並み保全に関心を寄せるようになり，歴史的･文化的に価値ある町並み，すなわち歴史的町並みを活かしたまちづくり運動が全国各地で取り組まれるようになった（大橋ほか，2003）．

歴史的町並み[3]とは，歴史的建造物の連続した集落景観であり，日本における歴史的町並みの多くはかつての門前町，城下町，宿場町，港町に残存する（織田，1997）．これらの地域における歴史的町並みの保全運動は，価値ある町並みの「継承」を本質的意義と位置づけられ展開してきた（久，2001）．このように保全運動によって整備・修景された歴史的町並みは観光資源としての性格を帯びるようになり，とりわけ過疎地域や農山村地域では地域活性化やまちづくりの一手段として注目されている（淡野・呉羽，2006）．

歴史的町並みに配慮した「まちづくり」の機運高揚にともなう，歴史的町並みに関する事例研究が建築学や都市計画の分野を中心に進展してきた

（中尾，2006）．近年では歴史的町並みが観光地として定着してきたことを受け，地理学における研究も一定数蓄積されてきた．歴史的町並みに関する既往研究は，歴史的町並み保全地区における修景実態に関する研究（小堀，1999；大橋ほか，2003），歴史的町並み保全運動にともなう観光地化プロセスや商業振興について論じた研究（溝尾・菅原，2000；大島，2004；兼子ほか，2004；橋本ほか，2010）などがある．その中で，本研究で取り上げる歴史的町並み保全運動をめぐる住民意識に関する研究については，大島（2005）や中尾（2006）が代表的であろう．大島（2005）は長野県楢川村奈良井宿における町並み保全に対する住民意識を分析し，地域住民が歴史的町並みを地域アイデンティティとして捉えていることを解明した．中尾（2006）は重要伝統的建造物群保存地区に指定されている福島県下郷町大内宿を対象として，歴史的町並みの保全事業と観光地化に対する住民意識を検討した．その結果，地域住民は町並みの宿場町の観光地化にともなう経済効果を評価しつつも，一方で「地域性の喪失」や「共同体意識の脆弱化」といった社会的側面に対する地域住民の危機感も認められることを指摘した．

歴史的町並みの形成過程やその実態には地域的な差異が認められ，町並み保全の一般的な傾向を掴むためには，より多くの事例研究を蓄積する必要がある（淡野・呉羽，2006）．既往研究では，歴史的町並みの保全運動の取り組みやその高揚過程，地域活性化の諸相など，歴史的町並み保全運動の実態やそれにより生じる諸問題が議論の中心であった．一方で，丸山ほか（2008）も言及するように，今日の日本において，歴史的町並みの保全運動が生じていない地域ないしは積極的に取り組んでいない地域も多数存在する．こうした地域では所有者の一存によって歴史的建造物の維持・管理が決定するため，彼らによる意思決定のもとで歴史的町並みが形成・変容するのである．先述の通り，地域住民は歴史的町並みを地域アイデンティティと解釈する傾向にあり，歴史的町並みの保全運動が生じていない地域においては，住民意識の形成が歴史的町並みの創出に大きな影響を与えるものと考えらえる．

本稿では，中山道の宿場町を対象として歴史的町並みの形成過程とその特性について検討する．宿場町を題材とした歴史的町並みに関する研究として，八橋（1976）や大島（2004；2005），小島ほか（2005），中尾（2006），孫ほか（2006）などが蓄積されるも，多くが重要伝統的建造物群保存地区や歴史的町並みの保全運動が浸透した地域，観光地化が進展した地域を対象としたものであり，住民主導で歴史的建造物を維持・管理してきた宿場町を対象とした研究は管見の限りみられない．

本稿の目的は，中山道望月宿を事例として，宿場町としての望月宿の歴史的変遷に着目しつつ，歴史的町並みの形成過程とその地域的特性を明らかにすることである．望月宿は中山道の宿場町であり，現在の行政区分では長野県佐久市に位置する．望月宿には格子・格子戸や桝[4)]，出桁造[5)]の軒といった，中山道の宿場町を特徴付ける景観要素が一定数存在する．一方で，望月宿では行政による歴史的町並みの保全運動はほとんど進展してこなかったため，所有者による意思決定のもとで歴史的建造物が維持・管理されてきたと考えられる．また，住民組織によるまちづくりも盛んであり，その中で歴史的町並みを観光資源として活用する動きも進展しつつある．したがって，行政主導の保全運動が生じていない地域における歴史的町並みの形成過程とその地域的特性を検討するうえで，望月宿を好例地域として選定した．

調査方法は，望月宿における景観観察や，歴史的建造物所有者や住民組織，望月歴史民俗資料館，佐久市役所建設部が管理する資料の分析および聞き取り調査を実施した（2014年５月および８月）．景観観察では，望月宿における現在の土地利用の把握ならびに歴史的町並みを構成する景観要素の分布について調査した．歴史的建造物所有者に対しては，建造物の歴史的変遷を把握できる資料の閲覧および複写を行い，建造物の維持・管理に係る意思決定やその取り組みについて訊ねた．住民

組織に関しては，望月宿の地域活性化を企図した組織である「NPO望月まちづくり研究会」に対して，これまでの活動実態について訊ねた．

本稿の構成は以下の通りである．まず，Ⅱ章では望月宿の開設から現在に至るまでの歴史的変遷を，とくに災害による宿駅構造の変容や廃藩置県にともなう宿場機能の衰退，明治期以降における望月宿の盛衰に着目しながら詳述する．そのうえで，Ⅲ章では現在における望月宿の土地利用形態を踏まえつつ，歴史的建造物の維持・管理形態について，景観要素の空間分布や建造物をめぐる保有者の意思決定過程を分析することより実証的に示す．続くⅣ章では歴史的町並みを構成する新たな景観要素の創出とその活用実態について，住民組織や行政による取り組みを整理して検討する．最後にⅤ章では，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ章を踏まえたうえで，望月宿が有する歴史的町並みの形成過程とその地域的特性を明らかにする．

Ⅰ－２　研究対象地域

望月宿[6)]は長野県佐久市望月地区に位置する宿場町であり，1600（慶長５）年に鹿曲川の左岸に形成された南北に延びる狭長な河岸段丘上に開設された（第１図）．鹿曲川は蓼科山を源に北流して千曲川へ注ぐ河川であり，旧来より大氾濫を繰り返して望月宿に壊滅的被害をもたらしてきたが，1812（文化９）年に鹿曲川一帯の大改修が行われて水難を逃れるに至った．鹿曲川が形成した段丘崖のひとつは，望月宿が位置する中山道沿いの地区と，現在の佐久市役所望月支所や望月高校のある地区の間を横断するように存在しており，両集落にはおよそ10mの標高差がある．また，望月宿から北西方向に向けて中山道が通っており，その先は茂田井間の宿[7)]や芦田宿まで続いている．鹿曲川の右岸は急勾配の山地であり，森林が卓越する．この斜面上に望月城跡が存在しており，その展望台より望月宿一帯を眺望することができる．望月城跡の南東の峠を中山道が通り，東隣の八幡宿はこの峠を越えた千曲川西岸に位置している．

望月宿を含む望月地区は度重なる市町村合併を経験してきた．町村制の施行によって1889（明治22）年に北佐久郡本牧村が発足し，1954年には本牧村が近隣村との合併を見越して町制施行し，本

第１図　研究対象地域

牧町となった．1959年には本牧町と北佐久郡布施村，春日村，協和村が合併し，望月町が誕生した．2005年になると佐久市，望月町，浅科村，臼田町が合併し，望月地区の行政区分は新「佐久市」となった．

Ⅱ　望月宿の歴史的変遷

本章では望月宿をめぐる歴史的変遷について，とりわけ江戸期に関しては災害の歴史，明治期以降は宿場町の盛衰に着目しながら記述する（第１表）．

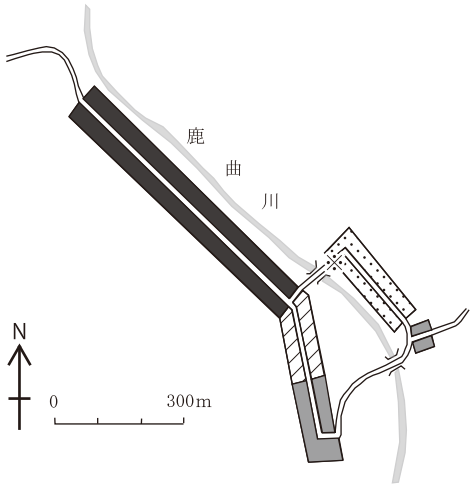
望月宿の大森家（本陣）の古文書「家系代々旧記」によると，宿駅の設置は1600（慶長５）年に始まった．21代目の大森久左衛門吉国が，幕府の命令によって望月里民[8)]を集めて宿駅建設に着手し，1602（慶長７）年に鹿曲川左岸の河岸段丘上に望月宿が開設された．望月宿設置以降，参勤交代による大名行列の増加や一般の往来客の漸増にともない，宿が過密状態となった．宿場構成員が増え，戸数の増大を余儀なくされたため，1629（寛永６）年に鹿曲川の右岸に望月新町が形成された（第２図）．望月宿と望月新町は別村でありながらも，「本宿（本町）と新町」として両村は一村とみなされていた．当初の往還は字長坂から鹿曲川に沿い，望月新町を経て，途中で鹿曲川を中の橋で渡り，望月宿の南江戸方に出ていた（望月歴史民俗資料館編，2007）．

「望月宿の歴史は災害の歴史である」ともいわれるように，とくに1700年代には度重なる鹿曲川の水害や火災といった災害に悩まされてきた．江戸時代における鹿曲川の大規模な水害は10件あり，その中でも，1742（寛保２）年の「戌の満水」と呼ばれる大洪水は，望月宿に甚大な被害をもたらした．この大洪水による被害は，本町では112軒中流出家屋38軒，潰家８軒，新町では58軒中流出家屋40軒，潰家７軒であった（第３図）．新町の被害がとくに甚大でほぼ全てが押し流されてしまったことで，鹿曲川右岸にあった新町は左岸台地の本町に続き移転を余儀なくされた．1745（延享２）年に領主より「本町地籍新宿」が与えられていることから，この新宿が移転地であり，この時期に移転が完了したといわれている．翌年になると新町は本町の加宿となったが，その後も「新町」として独立して存在している[9)]．また，新町移転にともなって，現佐久市望月支所上り口である八幡車付近は地割されて家屋が立ち並ぶようになり，新町と繋がった．これ以降，望月宿は本町・新町から成る宿駅構造を基盤として発展し，1875（明治８）年に望月町が誕生するまでその形態を維持してきた．

第１表　望月宿の歴史的変遷

年	事　項
1600	望月宿設置決定
1602	望月宿の開設
1629	望月宿が過密状態に
	望月新町が分町
1654	望月新田と観音寺新田の開発
1742	戌の満水により人家の大半が流出， 望月新町の移転
1745	宿の移転が完了
1765	望月宿の大火により 21 軒焼失 大洪水の発生
1766	真山家と鷹野家（脇本陣）の再建
1800	望月宿 108 軒，望月宿の最盛期
1808	大規模な洪水の発生
1812	鹿曲川の堤防完成
1819	大森家（本陣）の下男部屋から出火， 大森家と鷹野家の一部焼失
1823	大森家の再建
1832	凶作が続き他所へ退転した家が 7 軒， 家中旅稼ぎが 6 軒、それぞれ出現
1843	望月宿 83 軒，宿全体が衰退
1868	明治維新
1875	望月新町と望月町が合併，望月町に
1889	望月町，茂田井村，印内村が合併，本牧村に
1960	本牧町，布施村，春日村，協和村の合併により 望月町に
1970	望月町が過疎地域対策緊急措置法の対象に
1984	国道 142 号線バイパスの開通
1991	望月歴史民俗資料館開館
1993	望月町商工会館，現在の場所へ移設
2005	望月町，協和村，春日村，佐久市が合併， 新「佐久市」に

（望月町誌編纂委員会編（1997）により作成）



※1742 年まで中山道

凡　例

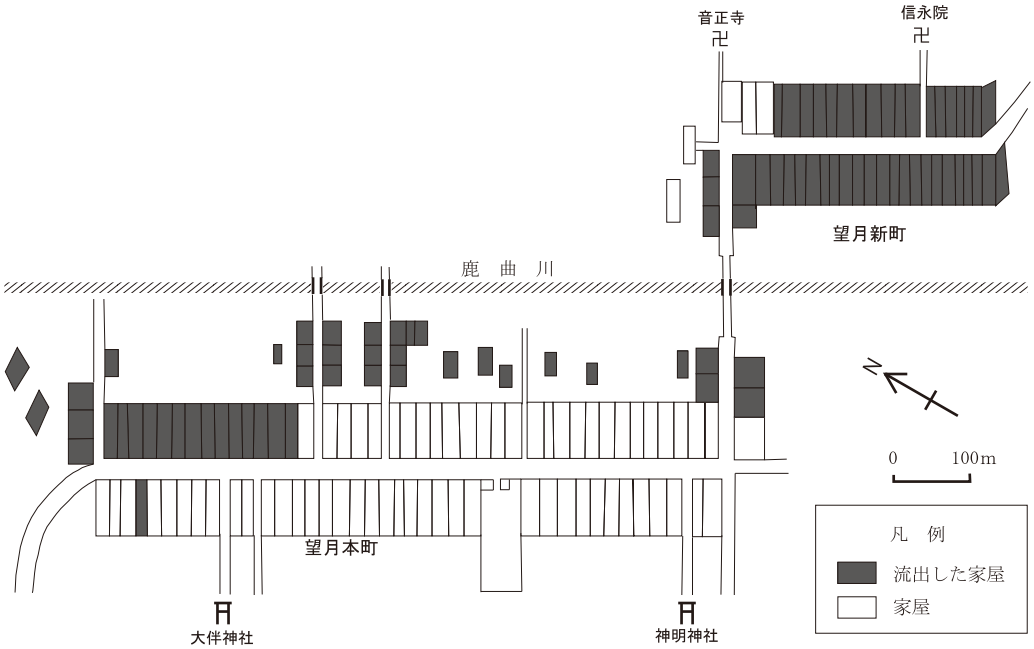
- 望月本町（1602 年～）
- 望月新町（1629 ～ 1741 年）
- 移転後の望月新町（1742 年～）
- 加宿された望月本町（1742 年～）

第２図　望月宿の形成過程

（望月歴史民俗資料館提供資料により作成）

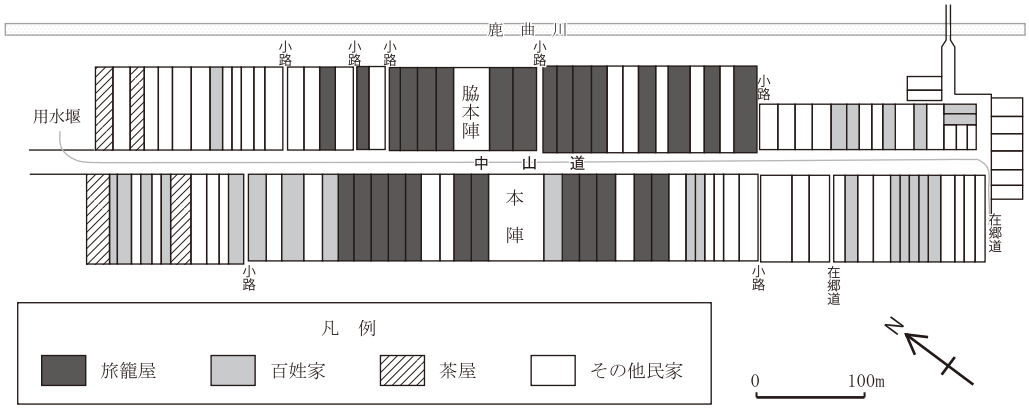
ただし，1765（明和２）年や1808（文化５）年に大洪水被害を受けており，とくに1765年には水害および火災と二重の災渦を被った．明和２年の「望月の大火」では，脇本陣をはじめ，宿東通りの旅籠屋21軒が全焼したが，直後に再建された．1804（文化元）年につくられた宿割図によると，旅籠屋が29軒，大泊の節下宿分が50軒，百姓家や商売屋が39軒，借家12軒，本陣１軒と，総数131軒の家屋が立地していた（第４図）．

明治維新以降，1875（明治８）年に望月本町と新町が合併して望月町が誕生し，1889（明治22）年には茂田井村および印内村と合併したことで，望月町は本牧村に含まれた．望月町は中山道が通っていたこともあり，輸送や商業などの経済的側面だけでなく，文化的にも高水準を維持していた．産業面についてみると，望月町では大正初期から養蚕業が徐々に発展し，また花街として賑わうようになった．養蚕業や製糸業の発展によって町は隆盛するようになり，望月宿とくに中山道沿いには，旅館に加えて料理屋や茶屋，さらには置屋も存在していた．



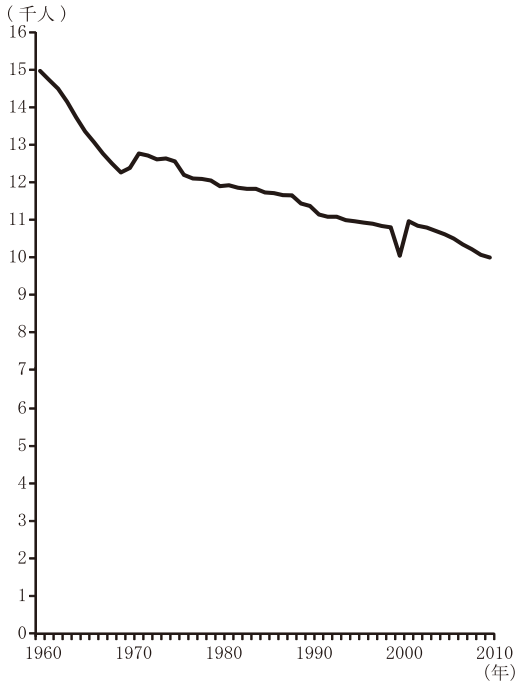
第３図　戌の満水による望月宿の被害状況（1742年）

（望月歴史民俗資料館提供資料により作成）



第４図　望月宿宿割図（1804年）

（望月歴史民俗資料館提供資料により作成）



第５図　望月町における人口推移（1960～2010年）

（住民基本台帳により作成）

第二次世界大戦以降も望月地区の中心性は維持され，新たな商店街が形成されるとともに，新興住宅や映画館も建設された．ところが，高度経済成長期以降，北佐久郡全域で農村の若年労働力が大都市へ流出し，その中でも望月町の流出は顕著であった（第５図）．望月町は人口減少が深刻化し，1970年には「過疎地域」に指定された（望月町誌編纂委員会編，1999）．それにともなう長野県の補助金事業で，望月町は国道142号線の改良を行った．1970年代当時，中山道は佐久市と立科町を結ぶ主要路であり，望月宿の自動車交通量は激増していた．これは望月宿の生活環境にも大きな影響を与え，とりわけ老朽化が危惧されていた建造物は耐震上の問題から改築ないしは取り壊しが進み，望月宿の歴史的町並みは大きく後退することになった．しかし，1984年に国道142号線のバイパスや新望月トンネルが開通し，佐久市，望月町，立科町を結ぶ新たな交通路が確立されると，望月宿の交通量は減少した．また，望月地区においては1975年に「望月町天来記念館（以下，天来記念館[10]）」，1991年に「望月町歴史民俗資料館（以下，歴史民俗資料館）」がそれぞれ開館した．また，1995年には商工会議所が望月町中心部から移転し，現在の「望月町商工会館」が新設された．

Ⅲ　歴史的建造物の維持・管理形態

Ⅲ－１　望月地区における土地利用

望月地区は，明治期以降中山道沿いの宿場町を軸として発展し，2005年に佐久市と合併するまで望月町の中心的機能を担っていた．本節では，望月地区における土地利用形態について，中山道沿

いの望月宿，昭和初期より商店街が発展した望月町中心地，鹿曲川右岸の旧望月新町の３地区に焦点を当てて説明する（第６図）.

望月宿には短冊状の地割が現在も残っている．すなわち中山道に面した狭い間口と奥行きの長い区画が卓越している．中山道北西部の土地利用は住居が中心であるが，歴史民俗資料館や望月町商工会館が立地する地点以南には小売店やサービス業を営む店舗も点在し，ある程度の商業集積がみられる．後述のように，中山道沿いの住居や店舗には歴史的町並みの景観要素が比較的残存しており，ほとんどの建造物は２階建てである.

望月町中心地には，比較的大規模な区画に金融機関，郵便局，農協および福祉施設などの立地がみられる．明治期以降,養蚕業の発展とともに「三盛社」などの製糸工場が立地し，大正期から昭和初期には花街としての性格もみられた．2014年現在，望月町中心地南部には小売業やサービス業の店舗が集積している．その多くが店舗兼住居となっており，とりわけ理美容店の割合が多い．理美容店の集積は，かつての花街としての隆盛と深く関連しているのであろう．三盛社の製糸工場は2000年代後半に取り壊され，現在は個人の住居となっている.

鹿曲川右岸の旧望月新町は，鹿曲川と急峻な山林に挟まれた狭小な平地上にあり，畑や水田が卓越する．八幡宿方面からの峠を越えた場所にかつての望月宿の入り口があり，その付近には短冊状の地割がみられる．ここはかつて望月新町という宿場であったが，現在は概ね住居として利用されている．また，城光院や信永院といった寺院が立地することが特徴であり，両寺院の間には望月城跡に向かう山道も整備されている.

Ⅲ－２　歴史的建造物の分布

本節では，歴史的町並みを構成する景観要素として，格子・格子戸，出桁造の軒，梲（うだつ）および蔵に着目し，歴史的建造物の分布にみられる特徴を説明する．なお，本稿では阿部ほか（1986），小島ほか（2005）および歴史的建造物保有者への聞き取り調査をもとにして，これら景観要素に着目した.

１）格子・格子戸

格子が装飾されている建造物は中山道沿いを中心とした望月宿に数多く分布し，望月町中心部や旧望月新町にも若干数を確認することができる（第７図）．一方で，格子戸は現在ほとんど残っていない．中山道沿いに立地する建造物の２階には格子の装飾が多く見られ，１階または２階のいずれかに格子・格子戸を装飾している建造物に関しては，分布傾向に特徴はみられない．一方で，１階および２階の両方に格子または格子戸を有する建造物は，全て中山道沿いに分布している（写真１）．また，中山道沿いには望月町商工会館や歴史民俗資料館など，1990年代以降に新設された格子をもつ建造物が立地している．これは歴史的町並みの創出を意図した設計であり，中山道沿いには宿場情緒の資源化を目指した建造物が新設される傾向にある.

２）出桁造の軒

出桁造の軒を有する建造物は，次の２種類に大別される．ひとつは，商家などの歴史的建造物またはその原形をとどめたうえで改築された建造物など，宿場情緒を残す木造の出桁造の軒を有する建造物（以下，伝統的出桁造）である（写真２）．もうひとつは，２階が前方にせり出している出桁造の構造ではあるが,木造建築ではない建造物（以下，現代的出桁造）である．伝統的出桁造はほぼ全てが望月宿の中山道沿いにあり，その中には格子や格子戸，梲を有する建造物も存在する（第８図）．一方で，現代的出桁造の建造物は，中山道沿いにはほとんど分布しておらず，その大部分は望月町中心地に店舗兼住居として点在している．それゆえ，現代的出桁造の建造物は面的に広がる統一的な景観と呼称するのは不可能であり，歴史的町並みを構成する景観要素とは判断し難い.

3）梲（うだつ）

梲の分布をみると，中山道沿いの建造物のみに設置されていることがわかる（第９図）．梲は建造物の両側に張り出した袖壁のことであり，防火壁としての役割を有していた（写真３）．望月宿では，宿駅形成以降幾度も大火に見舞われてきたために，梲をもつ建造物が数多く建設されたものと推察できる．また，梲のみられる建造物が鹿曲川側に多いのは，1819（文政２）年の大火の影響と考えられる．望月町商工会館や歴史民俗資料館など1990年代以降に新設された建造物には梲は設置されておらず，梲は旧来より維持・管理されてきた建造物にみられる特徴のひとつと判断することができよう．

4）蔵

蔵は他の景観要素と異なり望月宿広範に分布しており（第10図），その大半は土蔵[11]である（写真４）．蔵は宿駅開設当初から存在していたが，江戸期に頻発した災害や宿駅構造の変化にともない，望月宿では蔵の流出，損壊，移設を繰り返し経験してきた．したがって，現存する蔵の多くは江戸末期以降に建設されたものと判断できる．立地場所をみると，蔵は敷地の奥まった場所に立地する傾向にあることから，倉庫蔵として機能していたことが考えられる．それゆえ，格子や出桁造の軒，梲と比べても，蔵は現在の望月宿の歴史的町並みを構成はするものの，町並みの「演出」には貢献していないと判断できる．

Ⅲ－３　歴史的建造物保有者の意思決定

本節ではかつての本陣，脇本陣，旅籠屋，茶屋などの休泊施設を望月宿の主たる歴史的建造物と位置づけ，これらの歴史的建造物の維持・管理形態や景観要素の保全に対する建造物所有者の意思決定の所在について分析する．

1）大森家（本陣）

望月宿の中心部には本陣と問屋が立地し，宿の開設に尽力した大森氏が代々久左衛門を名乗ってその任に当たっていた．本陣の建造物は1730（享保15）年に建築されたが，1819年の火災によって全焼し，６年後の1825（文政８）年に再建された．大森家所蔵の平面図によると[12]，再建当時，往還沿いに間口一八間，奥行三八間という広い敷地に高札場，居宅部兼問屋場，客室部が存在した．再建された建造物には１階に格子戸，２階に格子が装飾された．しかし，生活環境の向上や利便性を考慮して，1960年代にそれまでの家屋を取り壊し，現在の家屋を新築した（写真５）．また，現在歴史民俗資料館が立地する敷地は，元来大森家が保有する土地であった．1887（明治20）年に，31代目がその敷地を法務省に寄付し，そこに登記所が誘致された．1980年代後半になると，望月町により登記所の敷地が買収され，1991年に望月歴史民俗資料館が開設された．

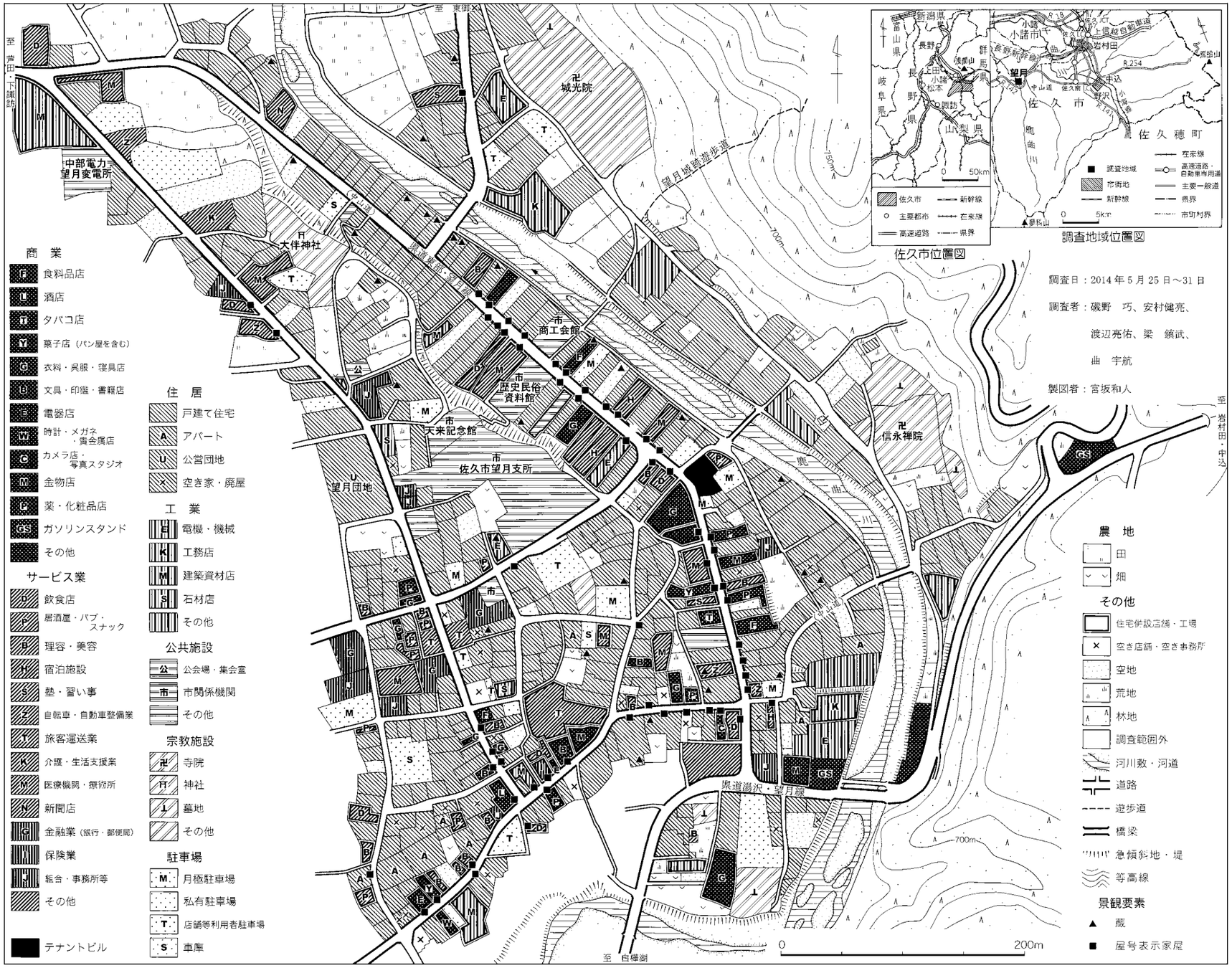
現在の当主は35代目であり，小児科医を営んでいる．1950年代前半に34代目が小児科を開業しており，35代目は開業医としては２代目である．35代目は望月宿の地域活性化に対する意識から，後述する望月まちづくり研究会に所属しており，2002年より小児科入口に屋号看板を設置している．江戸期の屋号看板は1819年の大火で焼失しており，現在保有している屋号看板は全て望月まちづくり研究会が製作したものである．

2）鷹野家（脇本陣）

鷹野家は望月宿の脇本陣であった．現在の当主は12代目であり，望月まちづくり研究会をはじめ数多くの団体で活動しており，歴史的町並みの保全に関しても積極的な姿勢を示している．後継者はいるものの，将来的な建造物の維持・管理の意思は明確ではない．

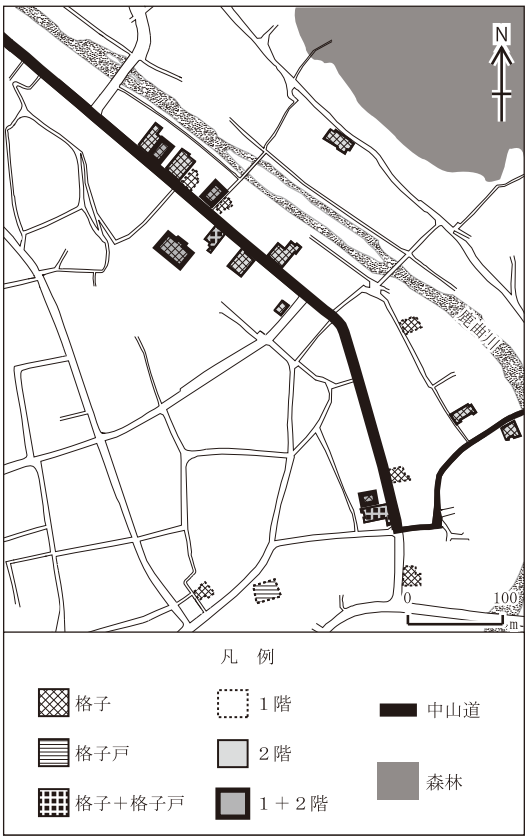
1819年の大火による焼失・再建から現在まで，家屋の内部構造に大きな変化はみられないが，生業形態や生活環境の向上に応じて建造物の増改築を繰り返してきた（第11図）．中山道に面した正面は，江戸期より平屋だったが，大正期に２階を養蚕業に活用するために増築し，１階には玄関と格子戸，２階には格子と藤棚を施した景観となっ

佐久市望月宿土地利用図

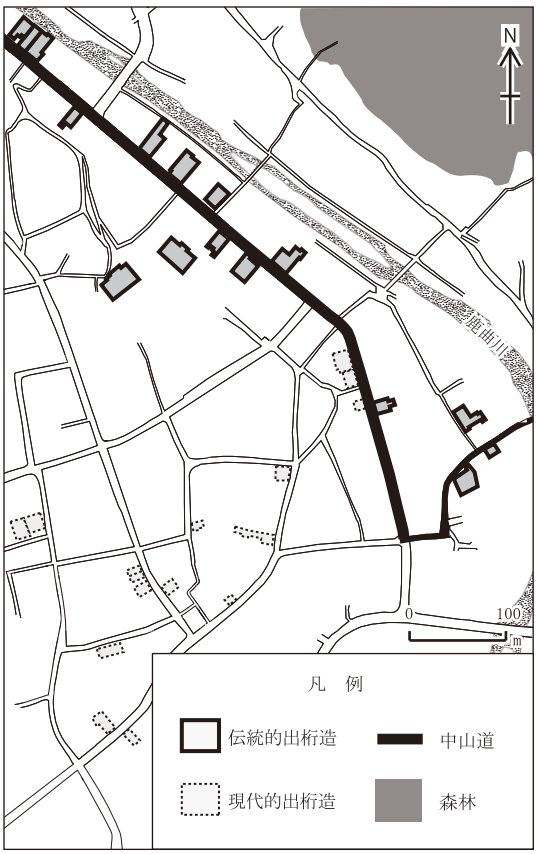


第６図　佐久市望月地区の土地利用図（2014年）

（現地調査により作成）



第７図　望月宿における格子･格子戸の分布（2014年）
（現地調査により作成）



第８図　望月宿における出桁造の軒の分布（2014年）
（現地調査により作成）

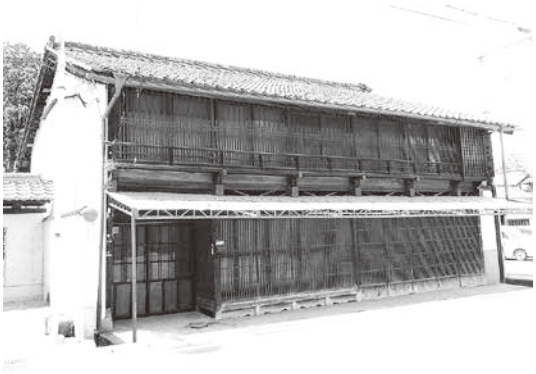


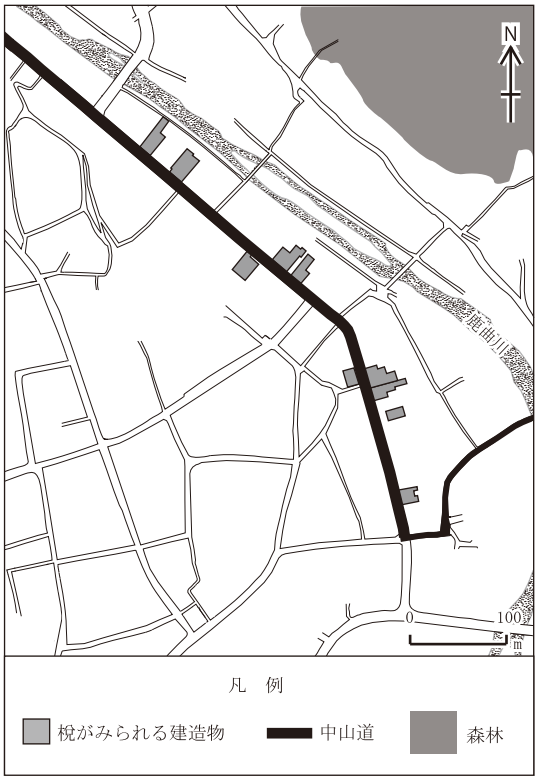
写真１　格子・格子戸の一例

注）格子は建造物２階窓部分に，格子戸は建造物１階縁側部に設置されている．

（2014年５月　渡辺撮影）

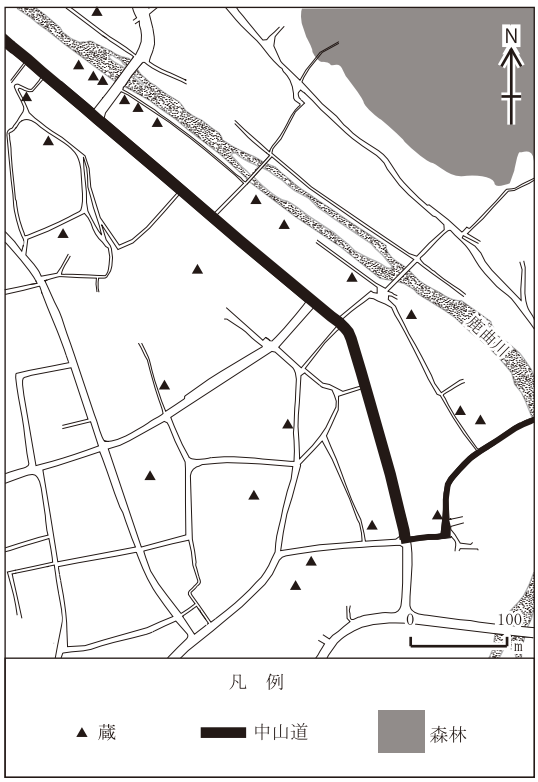
写真２　出桁造の軒の一例

（2014年５月　安村撮影）



第９図　望月宿における桜の分布（2014年）

（現地調査により作成）



注）範囲外にも若干数の蔵が分布している．

第10図　望月宿における蔵の分布（2014年）

（聞き取り調査により作成）

写真３　桜の一例

（2014年８月　渡辺撮影）

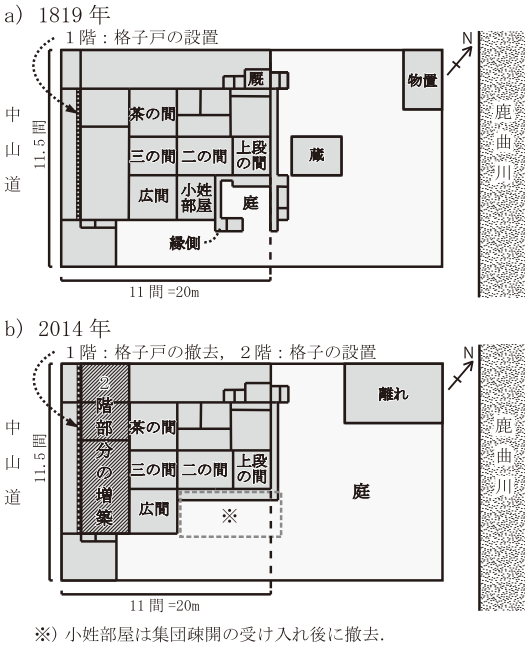
写真４　蔵の一例

（2014年５月　磯野撮影）

た（写真６－ａ）．1960年代には生活環境の向上と中山道の拡幅およびアスファルト整備の影響から，１階に設置していた格子戸を撤去した．一方で，1990年代後半になると，宿場情緒のある景観を再現するために，生活環境に影響の少ない２階に格子を再度設置した（写真６－ｂ）．また，１階入り口には脇本陣であったことを示す屋号看板を掲げている．内装についてみると，戦時中の集

写真５　大森家（本陣）の外観（2014年）

（2014年５月　渡辺撮影）



※）小姓部屋は集団疎開の受け入れ後に撤去.

第11図　鷹野家の内装

（a）鷹野家提供資料により作成，b）聞き取り調査により作成）

団疎開受け入れ時に風呂と便所を設置するために，小姓部屋を取り除いている．しかし，それ以外の部屋は小さな修繕などはあるものの，文政の火災後の再建当時の間取りが比較的維持されている．とくに上段の間は天井を高くするなど大名が泊まるための機能に特化しており，当時宿泊した大名家の屋号などもそこに保存されている．現在

a）1920年頃

b）2014年

写真６　鷹野家（脇本陣）の外観

（a）鷹野家提供資料により転載，b）2014年５月渡辺撮影）

の庭部分には，1950年ごろまで土蔵が存在していたが，倉庫蔵としての機能を失ったために取り壊された．旧来より物置が存在した場所は家屋に改修され，現在では離れになっている．

３）真山家・大和屋（旅籠屋兼問屋）

真山家・大和屋は望月宿の旅籠屋と問屋を兼ねており，幕末には名主もつとめた．現在の家屋の建築年代は1765（明和２）年の望月大火の直後であり，翌年に完成した．また，主家の再建と前後して土蔵が設置され，背面突出部はさらに後の増築である．その後，1841（天保12）年に「ちやのま」および「おかって」まわりの間仕切を変更し，明治期に表２階の小屋裏内への拡張と板葺屋根を

桟瓦葺に改変した．大和屋は全体として旧態を保ち，外観も宿場建築の意匠が凝らされている．大和屋は江戸中期の旅籠屋・問屋の遺構を残している点が評価され，1973年６月に国の重要文化財の指定を受けた．

家屋は中山道に面しており，切妻造平入で，正面は１階が半間幅の土庇，２階の屋根が張り出した出桁造の建造物である（写真７）．また，２階には格子があるため，現在も宿場情緒ある歴史的建造物となっている．国の重要文化財の指定を受けた後，真山家では事前予約を受けた場合のみ建造物内部の見学を許可していたが，家主の意向によって現在は実施していない．

写真７　真山家・大和屋の外観（2014年）
（2014年８月　渡辺撮影）

４）真山家・山城屋（旅籠屋）

現在旅館を営んでいる真山家・山城屋は，江戸期においても旅籠屋として機能していた．当時の屋号看板には「山城屋」と記されており，現在の旅館の名称にもつながっている．現在の位置に居を構えたのは明治期以降，旅館を営み始めたのは大正期以降のことである．現在の当主は17代目であり，望月まちづくり研究会の方針に賛同して歴史的町並みの保全には積極的な姿勢である．しかし，後継者はおらず，今後の旅館経営および建造物の維持については消極的な姿勢を示している．

建造物は1882（明治15）年に竣工され，骨組みはそのままに増改築が多数行われており，1993年に最後の改築を行って以降，現在の姿となっている[13]．外観の変遷について詳述すると，中山道に面した建造物正面は，戦後まで１階に格子戸，２階に格子が設置されていた(写真８－ａ)．しかし，1960年代，中山道の拡幅および道路整備時に，１階に設置していた格子戸の取り外しを行った．格子戸を残すことも検討したが，利便性を重視して取り外した（写真８－ｂ）．一方で，宿場情緒を維持するために，現在でも２階の格子はそのまま維持している．また，１階の玄関脇には屋号看板と灯篭状のモニュメントを設置している（写真８－ｃ）．屋号看板は望月まちづくり研究会の呼びかけによるもの，灯籠状のモニュメントは望月地区在住の知人の製作によるものである．

５）真山家・山本屋（旅籠屋）

現在の当主は16代目であり，17代目となる息子および孫と同居している．江戸期は旅籠屋を経営していたが，明治期以降は大工，酒屋，瓦屋といった多様な生業を営んできた．初代は江戸期に望月宿に移住しており，第二次世界大戦前まで江戸期に建築された家屋に居住していた．その家屋には格子などを装飾していた．現在の家屋は望月町在住の大工によって改築されたものであり，歴史的町並みの景観要素となる格子や格子戸は設置していない（写真９）．敷地の奥には明治期に建設された土蔵があり，旅籠屋時代の御膳などが保管されている．また，家屋の入り口には屋号看板を掲げている．この屋号看板は明治期以前に製作されたもので，「山本屋」と記された江戸期の旅籠屋時代を偲ばせるデザインとなっている．

望月宿の歴史的町並みの保全に対して，16代目および17代目は前向きな姿勢を示している．戦後における望月宿の交通量増加といった交通環境の変化にともない江戸期から続く家屋を取り壊したものの，1984年以降，生活に支障のない範囲内で宿場情緒を「残したい」と考えるようになった．望月宿では空き家が増加する傾向にあり[14]，今後はこれらの空き家を古民家として保全する活動に積極的に取り組む意向を示している．

a）1950年頃

b）1980年頃

c）2014年

写真８　真山家・山城屋の外観

（a）b）山城屋提供資料により作成，c）2014年５月　渡辺撮影）

写真９　真山家・山本屋の外観（2014年）

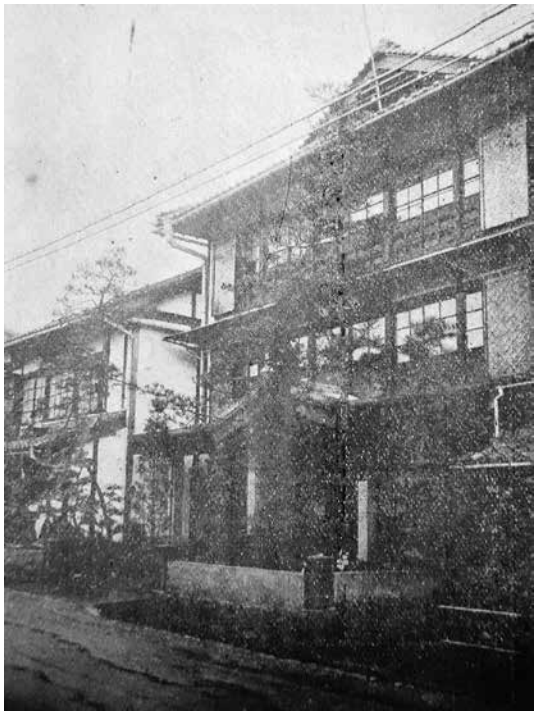
（2014年８月　渡辺撮影）

６）井出野屋（茶屋）

井出野屋旅館は1965年に創業した旅館であり，大正期には料亭であった．この料亭は望月宿内に５店舗あり，井出野屋はそのうちの第２支店であった．現在の当主は４代目で，５代目は佐久市中心市街地で料亭を営んでいる．今後，望月宿内における観光化の動向次第で旅館の後継ぎになる可能性もある．

建造物は大正末期に建設されたものであり（写真10－ａ），現在まで大規模な改修を行っていないため，外観は当時の面影をほぼそのまま残している（写真10－ｂ）．外観や内装は望月宿の他の建造物に見られた建築様式とは一線を画す．2000年代前半には，望月宿の歴史的町並みに馴染ませるため，かつ周囲から目立たせるために，当主の知人に依頼して玄関部分に常夜灯を設置している．内装に関しても大正期のままである．現在の客室は13室であり，一般的な客室は八畳一間の和室である．母屋の裏には土蔵があり，大正末期から現在にわたり倉庫蔵として利用されている．国道142号線のバイパス開通までは大型車両の頻繁な通行により振動などの建造物への影響がみられたが，バイパス開通後，その被害は軽減されている．また，耐震基準の規定変更によって今後建造物の改装を強いられる可能性があり，その際の費用によっては旅館を継続させるかの決断に迫られる．

a）1930年頃



b）2014年

写真10　井出野屋旅館の外観

（a）井出野屋旅館提供資料より転載，b）2014年５月　磯野撮影）

Ⅳ　歴史的町並みの創出

幕藩体制崩壊による宿駅制度の廃止をはじめ，戦後のモータリゼーションの進展や生活環境の変化の中で，望月宿の歴史的建造物は淘汰されつつあった．しかしながら，宿場情緒ある歴史的町並みが喪失の一途を辿る一方で，近年徐々にではあるが歴史的町並みをめぐる住民意識は高揚してきた．また，2000年以降になると，住民組織や行政によって歴史的町並みの復元・再現や景観要素の新規創出がなされており，望月宿の歴史的町並みを「資源」として活用する動きが進展している．

本章では，歴史的町並みを創出してきた住民組織「NPO望月まちづくり研究会（以下，望月まちづくり研究会）」や佐久市による取り組みを分析し，新しい景観要素がいかなる意図で創出され，どのように活用されているのかを検討する．

Ⅳ－１　望月まちづくり研究会の取り組み

１）設立背景

望月まちづくり研究会は，2000年に有志によって結成され，2004年にNPO法人となり現在に至っている．結成以前は望月町商工会青年部内に関連する活動が若干みられたにすぎない．後の望月まちづくり研究会の会員が観光客に望月宿について訊ねられた際，「重要文化財の福王寺」や「軽井沢や小諸の隣町」程度の内容しか答えられず，望月宿という場所性を地域住民が理解していない状況に危機感を抱いたという．こうした状況下，1999年に後の望月まちづくり研究会の会員と望月町商工会青年部が望月城跡[15]の整備に着手した．主郭から眺める景観の審美的価値の認識を契機として地域住民の望月宿に対する学習意欲が増幅し，望月町教育委員会主催のまちづくり講座などへの参加を通して，2000年に望月まちづくり研究会が発足した．

2004年以降，望月まちづくり研究会はNPO法人として地域活性化に向けた活動を展開している．組織発足直後は望月町商工会に付随して活動してきたが，「自分たちだけで活動を遂行したい」という会員の意思のもと，組織をNPO化し，法人という公の資格を獲得したことで，各種支援金の契約時や書類提出に際し，信用・信頼を得やすくなるというメリットが生じた．

2014年現在，望月まちづくり研究会の会員数は23名である[16]．その中で，22名は佐久市内に居住しており，その約60％は望月地区在住である．また，佐久市内には関東地方からの移住者の会員もおり，佐久市以外に居住する会員は福岡県在住である．組織設立から14年が経過したが，ここ数年の会員数はほとんど変動しておらず，20名前後で落ち着いている．会員の属性をみると，年齢層は40代から70代で，とりわけ60代の男性が多い．

次節では，望月まちづくり研究会の主たる活動である看板整備事業，望月城跡整備，イベント事業に焦点を当て，具体的な活動実態について言及する．

2）看板整備事業

①屋号看板整備の背景と事業概要

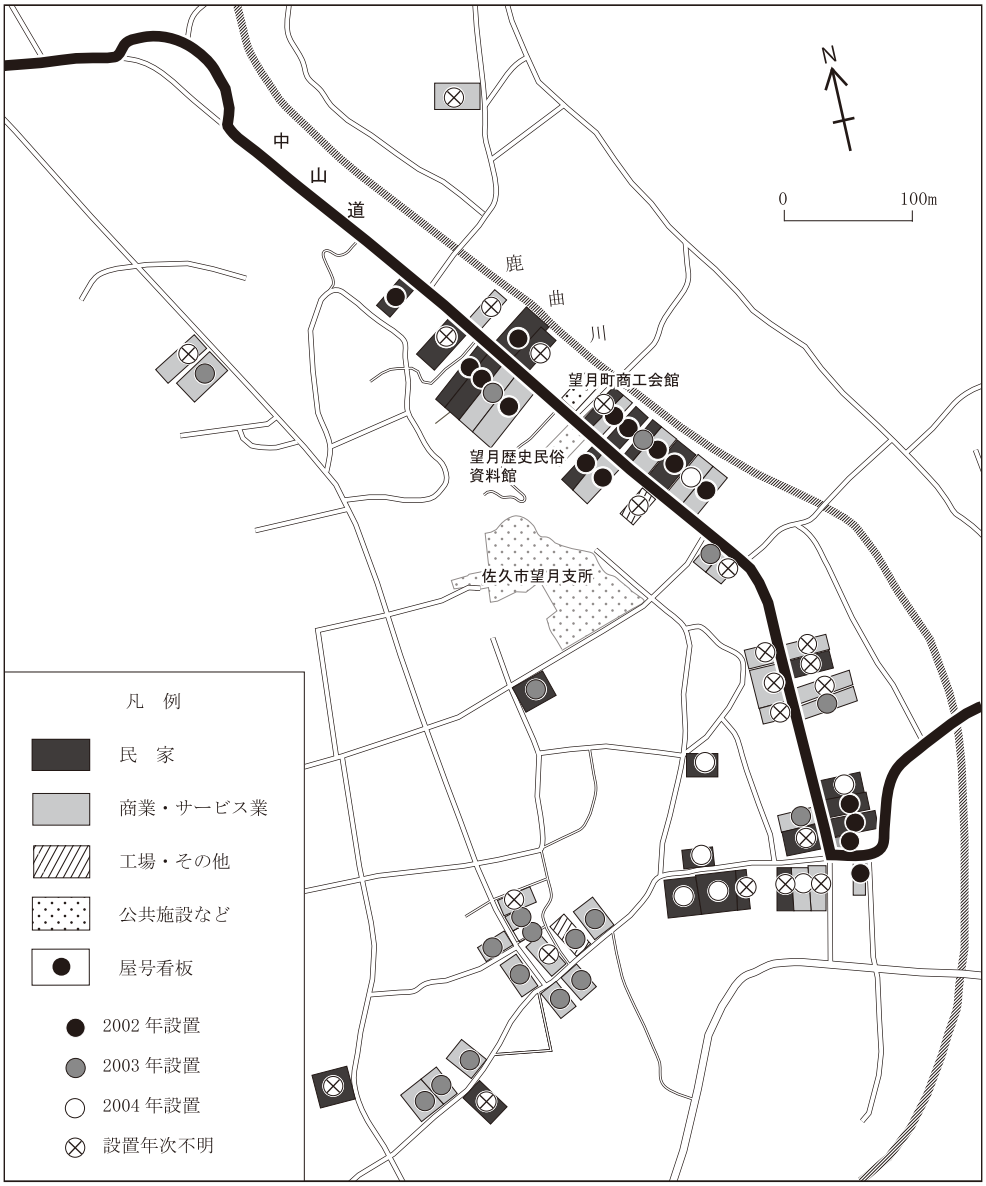
望月宿に屋号看板が設置されるようになった発端は，2000年に開催された望月宿の公開講座「まちづくり講座」である．この講座の中で比田井天来[17]や天来記念館にまつわる講話が行われたことを契機として，まちづくりの一環で協和地区出身の比田井天来門流の書道家が揮毫（きごう）した屋号看板を掲げる計画が提案された．また，望月宿には江戸期からの屋号看板を保有している家屋が多く，景観の統一感を醸成することも加味して計画が設定された．計画の実行に向け，古文書の看板に関する講座の開催や，実際に屋号看板を掲げている和田宿での景観観察も行った．その結果，書体や看板の大きさ，形状を統一すると屋号看板の個性が生かせなくなるため，自然素材の木版に多くの書道家による多彩な揮毫が望ましいとの結論に達した．

これらを踏まえ，2002年に比田井天来の生誕130年を記念し，また中山道開設400年に併せて，比田井天来門流の書道家による第１回看板揮毫会が春日温泉「かすが荘」にて行われた．揮毫会の開催に当たり，全国各地から10数名の書道家が招集され，書道家と施主との間で屋号看板の書体や文字に関して相談した後，設置家屋の意向に合わせた屋号看板が製作された．なお，屋号看板に用いる木版は，望月町在住の大工より安価な廃材を購入している．その後，第２回揮毫会が2003年に，第３回揮毫会が2005年に，いずれも「駒の里ふれあいセンター」で行われた．これらの揮毫会は望月まちづくり研究会が中心となり，望月町商工会望月支部との共同で行われた事業であるが，望月町教育委員会と天来記念館の全面的な後援と書道家の無償協力を基盤としている．この看板整備事業によって，望月まちづくり研究会は佐久地域景観協議会から「第７回佐久地域景観賞」を受賞している．現在，看板整備事業は望月町商工会やNPO法人未来工房[18]（以下，未来工房）に引き継がれており，屋号看板は望月まちづくり研究会および未来工房との共同で発行された「信州書の里望月散策マップ」の中で，書道家の紹介とともに掲載されている．

②屋号看板の整備状況

2014年現在，望月町には望月宿を中心として80枚以上の屋号看板が設置されている．本項では景観観察および屋号看板の施主に行った聞き取り調査の結果に基づいて，これらの屋号看板の整備状況について，屋号看板の分布とその設置年次に着目しながら分析する（第12図）．

望月宿と望月町中心地の商店街に屋号看板が集積しており，とりわけ前者に多い．屋号看板の設置経費として，望月まちづくり研究会が施主から10,000円を徴収していた．そのため，2002年当初は屋号看板の設置に反対する地域住民も多く，最初に望月まちづくり研究会会員が多く居住する望月宿に屋号看板を設置したため，結果として望月宿に2002年設置のものが多くみられる．また，望



注）望月地区以外にも，国道 142 号線沿い，協和地区，布施地区，春日地区にも屋号看板が設置されている．

第12図　屋号看板の分布と設置年次

（現地調査により作成）

月宿には既述の通り宿場情緒を感じさせる建造物が複数立地しており，屋号看板の設置によって望月宿の歴史的町並みを再現するといった施主の意図も組み込まれている（写真11－ａ）．望月宿は同姓が多く，「大和屋」，「山城屋」など屋号看板に記された文字が渾名として使用されており，望月宿における屋号看板は景観だけでなく，望月宿の生活・文化を反映したものでもあった．

2002年に望月宿を中心に掲げられた屋号看板は，江戸期の宿場情緒を偲ばせる媒体として，地域住民だけでなく観光客にも好評となった．そのため，屋号看板の設置に賛同する地域住民は徐々

に増加し，2003年に数多くの屋号看板が製作されることになった．望月宿にも一定数設置されたが，望月町中心部における商業施設の設置数が増大した．商業施設などに設置された屋号看板は，その店舗の名称や施主の意向を反映した個性的なものが多い（写真11－ｂ）．2004年以降も屋号看板の製作は実施されたが，そのほとんどは2002年ないしは2003年に設置されたものである．ただし，江戸期に製作された屋号看板をそのまま掲げている場合もある．また，脇本陣である鷹野家では，江戸期の屋号看板は家屋の内部に設置しており，新たに製作した屋号看板を家屋の外部に設置するといった工夫もみられる．

ａ）事例①

ｂ）事例②

写真11　屋号看板の一例

（ａ）2014年５月　渡辺撮影，ｂ）2014年５月　安村撮影）

３）望月城跡の整備

先述の通り，望月城跡の整備は望月まちづくり研究会の組織発足の契機となった活動である．城跡整備の方向性を決定する過程で，小諸城跡や砥石城跡などの整備実態や管理状況を見学し，可能な限り現状の望月城跡を保全することが決定した．そのため，最上部の主郭周辺に展望台を設置する際も，樹木の伐採量には細心の注意を払った．2014年現在，主郭のある城跡最上部には観光客に感想や意見を書いてもらうノートが置かれており，その意見や感想を踏まえ，望月まちづくり研究会は望月宿全体を見渡せる場所に展望台を整備した（写真12）．また，遊歩道にドウダンツツジを植え，城郭の段差のある場所に木製の階段を設けている．こうした望月城跡の整備と並行して，毎年３回程度の草刈りが行われている．

４）イベント事業

望月まちづくり研究会では，望月宿の歴史的町並みを活用したイベントも開催している．たとえば，望月町在住の児童を対象とした「望月探検クイズラリー」は，クイズを解きながら望月宿とその近隣を歩いて回り，随所で地域に関するクイズに答えてそのポイントを競い合うもので，望月宿の文化や歴史に対する児童の関心を高めることを目的としている．この事業は「長野県地域発元気づくり支援金事業」として開催され，クイズの具

写真12　望月城跡から眺める望月町

（2014年５月　磯野撮影）

体的内容については望月まちづくり研究会が考案している．

また，2005年より望月宿の地域住民を対象とした歴史講座も開講している．「地域住民の自地域発見」を促進するために，歴史講座では「望月氏・中山道の歴史」といった比較的身近なテーマを扱っており，講師は佐久市教育委員会や歴史民俗資料館の学芸員などが務めている．

Ⅳ－２　行政による取り組み

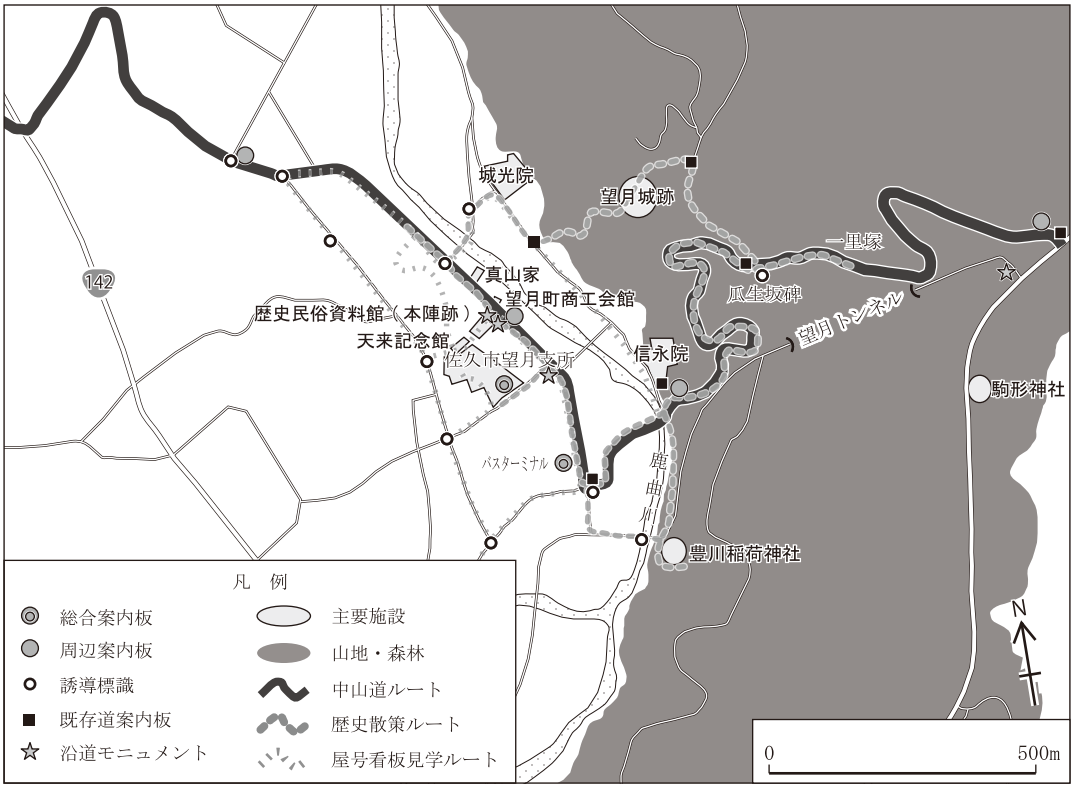
望月宿の歴史的町並み創出に関する行政の取り組みとしては，佐久市による「望月宿まちづくり交付金事業」が挙げられる．望月町が佐久市と合併した2005年以前は，歴史的町並みの保全・活用に係る取組みは望月まちづくり研究会や望月町商工会，歴史的建造物保有者など住民主体によるものであった．こうした状況下，2004年に望月宿がまちづくり交付金事業を申請すると2005年３月に採択され，2008年までの３年間，望月宿での事業が行われることになった．望月町は2005年に佐久市と合併したため，結果として佐久市の事業として推進されることになった．

交付金の基幹事業は都市公園整備，回遊ルートサイン整備，沿道モニュメント整備であった．本節では歴史的町並みの形成に関わる回遊ルートサインおよび沿道モニュメントの整備について言及する[19]．設置の過程として，沿道モニュメントのデザインや回遊ルートの設定などを東京都の経営コンサルタント企業に依頼し[20]，完成した事案をもとに行政・住民間で調整を行った．実際の工事は2008年前後に開始され，2009年までにその整備が完了した．

回遊ルートサインや沿道モニュメントの整備により観光周遊ルートが確立され，望月宿への観光客の誘導が大幅に進展した(第13図)．沿道モニュメントは歴史民俗資料館の入り口に２機，佐久市望月支所へと続くＴ字路に１機，そして望月トンネル入り口に１機と，合計４機が設置されている（写真13)．回遊ルートサインについては，総合案内板，周辺案内板，誘導標識，既存道案内板などが該当する．かつて，既存道案内板は，望月城跡への出入り口や一里塚周辺，新町区域の枡形など設置数は少なく，その情報量も非常に限定的であった．2009年に回遊ルートサインが整備されると，望月宿に点在する観光資源の立地場所やそこまでのアクセスなどが示され，観光客に対する情報提供量は豊富なものとなった（写真14)．総合案内板は望月宿の観光の拠点となる佐久市望月支所の駐車場およびバスターミナルに設置されている．周辺案内板についても，望月宿の分岐点となる場所に設けられている．誘導標識は主に望月宿内の十字路に設置されており，その数はとりわけ屋号看板が集積する望月町中心部の商店街に多い．

回遊ルートサインと沿道モニュメントが整備されたことで，望月宿をめぐる観光ルートも策定されるようになった．中山道ルート上には一里塚や瓜生坂碑をはじめ，観光資源になりうる建造物が望月宿内に多数立地している．歴史散策ルートについては，中山道に加えて，城光院や望月城跡，豊川稲荷神社といった文化的施設も観光の対象となっている．屋号看板見学ルートは，対象が分散して分布しているため，効率的かつ確実に回遊できるよう設定されている．

2011年になると，佐久市観光協会望月支部によって「中山道望月宿案内大看板整備事業」が着手された．これは前述の長野県地域発元気づくり支援金による事業であり，望月宿入口にあるバスターミナルの既存大型看板を新調した．この設置を通じて観光客に対する望月宿や地域資源，文化伝統継承イベントの紹介，宿場町を意識させる雰囲気づくりなどが意図されている．しかし，望月町には望月高原といった自然資源や春日温泉や布施温泉などの温泉施設が豊富であり，佐久市観光協会望月支部による望月宿の歴史的町並みに対する観光資源としての位置づけは依然として低い．そのため，望月宿の観光ルートが策定されつつも，これらを観光資源として活用しきれていないことが課題となっている．



第13図　望月宿における回遊ルートサイン・沿道モニュメントの整備状況（2014年）

（聞き取り調査および佐久市役所提供資料により作成）

写真13　沿道モニュメントの一例

（2014年５月　渡辺撮影）

写真14　回遊ルートサインの一例

（2014年５月　磯野撮影）

Ⅳ－３　歴史的町並みの利活用

１）歴史的町並みの復元

1990年代以降，望月宿とりわけ中山道沿いに新築された建造物は，歴史的町並みに配慮した建築様式のものが多い．その中で２階に格子を施す建造物が目立ち，望月宿の歴史的町並みを復元させる動きが顕在化しつつある．本項では歴史民俗資料館と望月町商工会館の事例について説明する．

歴史民俗資料館は，1991年に設立された望月町所有の建造物である．その設立の動きは望月町民の要望によるもので，1985年12月の町会議にみられる．その後1990年６月の町議会において，望月町の活性化と観光誘致，望月町の歴史に対する地域住民の理解を深めるという側面からその設立が提案され，議決された[21]．先述の通り，歴史民俗資料館の土地は元来本陣であった大森家保有のものであり，明治期に土地を分割して法務局に提供した後，望月町がその土地を買収して歴史民俗資料館が建設された．建造物の設計には歴史民俗資料館の学芸員が関与しており，その様式に対して，出桁造の軒を有する建造物にすること，２階に格子を装飾することを要望した（写真15）．２階建ての建造物は，蚕室をイメージした内装となっている．歴史民俗資料館の入り口には屋号看板が掲げられているが，これは望月まちづくり研究会の取り組みに便乗して取り付けられたものであり，望月町が費用を負担するかたちで設置された．

望月町商工会館は，1993年に現在の場所に移転・新築したものである．1960年に望月町商工会が設立された後，1969年に長野県および望月町の補助金，商工会会員の負担金により八十二銀行の旧店舗を改築して，独立した商工会館を開設した．さらに，1993年には制度化された国県補助金制度や町補助金，会員負担金などを受け，望月町から土地を借り受けた後，現在の望月町商工会館竣工に至った．元来消防署が置かれており，1991年に歴史民俗資料館の駐車場として整備された後，望月町商工会館が建設された．建築時には江戸期の宿場情緒や歴史的町並みに配慮し，中山道に面する建造物の２階に格子を装飾している（写真16）．

歴史民俗資料館および望月商工会館は1990年代に新設された建造物であり，両者ともに２階に格子を装飾することで宿場情緒を偲ばせ，歴史的町並みの復元に大きく貢献している．その背景には地域住民の宿場情緒に対する郷愁の念が存在し，両建造物はそれを具現化した建築様式であると推察される．

２）歴史的町並みの資源化

近年，望月宿では歴史的町並みを活かしたまちづくり運動が隆盛しつつある．先述の通り，望月まちづくり研究会は望月宿の活性化に積極的な姿勢で取り組んでおり，望月宿の歴史的町並みを「資源」として評価し，活動を通して地域住民や観光

写真15　望月歴史民俗資料館
（2014年８月　渡辺撮影）

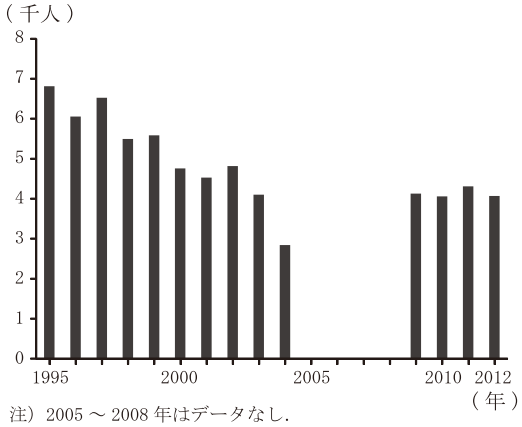
写真16　望月町商工会館
（2014年５月　渡辺撮影）

客を対象にその価値の教育・啓蒙を行ってきた．

歴史民俗資料館もまた，望月宿が有する歴史的価値を見出す，ないしは地域の再発見を促す活動を展開している．歴史講座がほぼ毎月開催され，「戌の満水」や「中山道の成立と変遷」といった望月宿に関わりの深い内容も取り上げられている．講師は歴史民俗資料館の館長や学芸員，佐久市教育委員会職員などが担当している．また，歴史民俗資料館は学芸員によるバスツアーも企画しており，これまでに東信濃の御牧を巡るツアーや佐久市の石造文化財めぐりが開催された．

前項で言及したように，歴史民俗資料館を設立した目的は町の活性化と観光誘致，望月町の歴史に対する町民の理解を深化させることである．展示室は３室あり，第１展示室は埋蔵文化財，第２展示室は望月宿の史料，第３展示室は民俗史料を展示している．年間来訪者数をみると，1995年から2004年にかけては右肩下がりであるが，佐久市と合併した2005年以降，一定数を維持している（第14図）．来訪者の約80％が佐久市外からの訪問であり，さらにその大部分が長野県外から訪れている．佐久市外からの訪問者は歴史愛好家などが多く，佐久市内については各種教育機関，老人クラブなどがその大半を占めている．

望月宿では望月まちづくり研究会や歴史民俗資料館によって，これまでに歴史的町並みの有する文化的価値を「資源」とした活動が展開されてきた．このような取り組みは望月宿の地域活性化を意図したものであり，望月宿への訪問者数も横ばいないしは微増していることから，一定の効果を獲得したものと判断できよう．しかし，佐久市が設定した観光ルートや屋号看板，歴史民俗資料館などは，望月町ないしは佐久市の観光資源としてはあまり認知されておらず，観光資源としての潜在性を有するものの活用されきれていない側面も否定できない．



注）2005 ～ 2008 年はデータなし．

第14図　望月歴史民俗資料館における年次別来訪者数推移（1995～2012年）

（望月歴史民俗資料館提供資料により作成）

ここで，歴史的町並みを「資源」とした活動の成功例として，望月宿の隣に位置する芦田宿の事例を紹介したい．芦田宿では，立科町や立科町教育委員会，立科町商工会の協力のもと，「中山道ウォーキングinたてしな」が開催されており，立科町より開催費用の半額が補助されている．芦田宿をめぐる行政区分は一貫して立科町であり，それゆえ行政の歴史的町並みに対する財政基盤が確立され，それが重要な要素となっている．また，中山道26宿語り部という地域住民によるガイド組織も形成されており，彼らは芦田宿のインタープリターとして機能している．このように，芦田宿では行政や歴史的建造物保有者，住民組織の連携を強化することで観光客の受け入れ態勢を整えており，芦田宿を立科町の重要な観光資源と位置づけ，積極的な宣伝活動を行っている．

このように，歴史的町並みの有する文化的価値を「資源」として活用するためには，行政の経済的支援やインタープリテーション機能の充実が求められる．望月宿では，行政や住民組織による歴史的町並みの復元や利活用が行われてきたものの，それらが有機的に結び付いているとは言い難い．それゆえ，各主体間の連携強化や組織的な観光戦略を策定することが喫緊の課題であると指摘できよう．

Ⅴ　望月宿における歴史的町並みの形成過程

本章では，望月宿の宿場町としての歴史的変遷に着目しつつ，歴史的町並みを構成する景観要素がいかなる住民意識や地域的背景のもとで変容したのかを分析することより，望月宿における歴史的町並みの形成過程およびその地域的特性について考察する（第15図）.

江戸期に宿駅制度が導入されると，望月本町に中山道の宿場町に特徴的な格子や格子戸を装飾した出桁造の家屋や土蔵が年々新築された. しかし，数度の水害と火災により，現存する建造物は1766（明和３）年に再建されたものが基盤となっている. 望月宿に現存する歴史的建造物のほとんどは，江戸期後半以降に改築ないしは新築されたものであると考えられる．また，家屋には桝が取り付けられるようになり，望月宿の町並みは災害の影響を色濃く反映していた.

明治維新によって宿駅制度が廃止され，望月町ではその後の養蚕業の発展によって地域住民の生業形態は大きく変化した．宿場情緒を残す建造物は，こうした生活環境の変化によって徐々に改築ないしは取り壊されるようになった．また，大正期から昭和初期にかけて，望月町は花街として発展することになり，望月地区の町並みは宿場町としての景観と花街としての景観が混在する様相を呈していた. しかし, 第二次世界大戦の勃発によって置屋や茶屋は徐々に衰退傾向を示し，花街としての隆盛は終焉を迎えた.

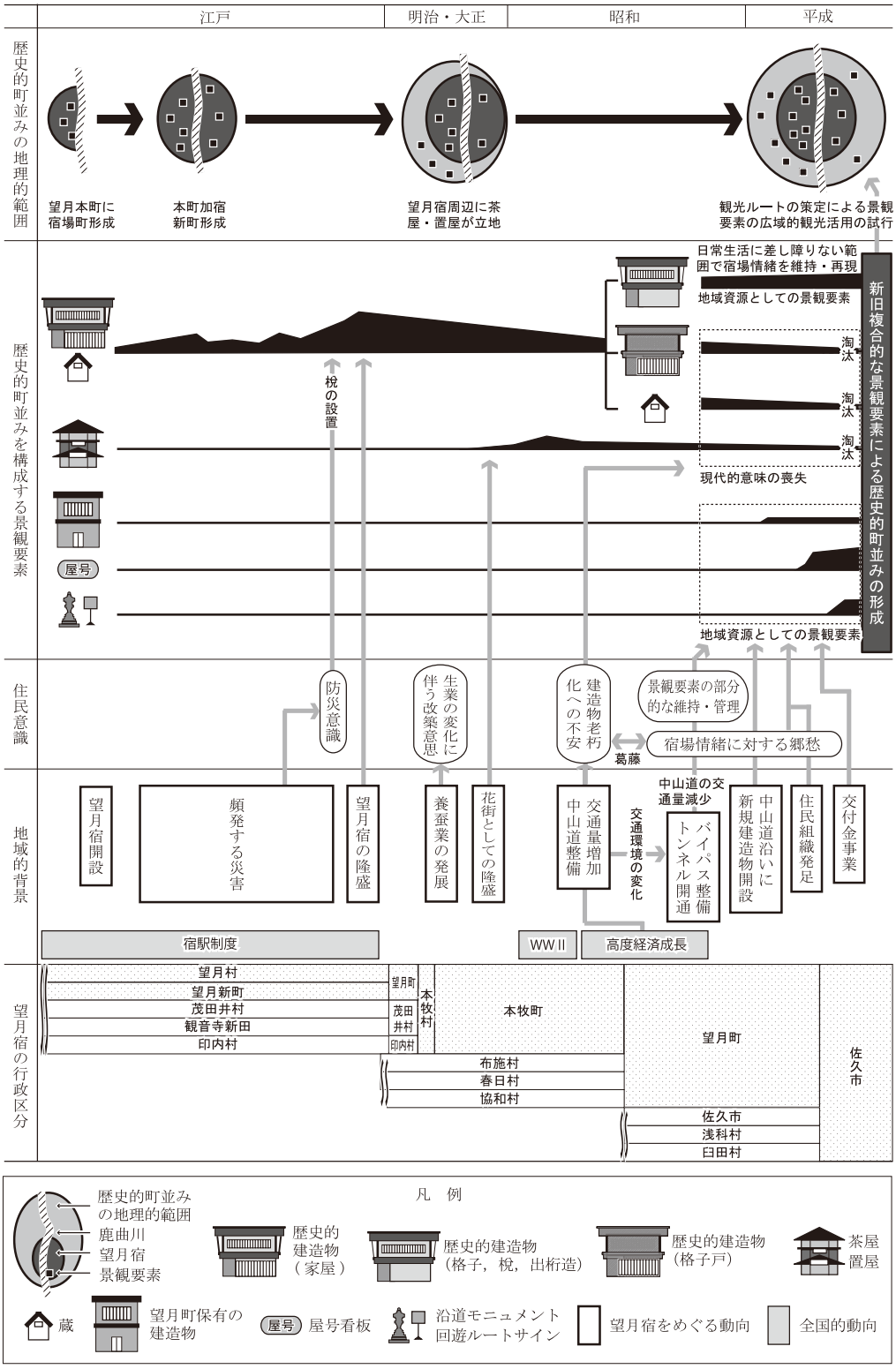
終戦後，高度経済成長期には，望月町においても生活環境は激変し，とりわけ全国的なモータリゼーションの到来は，望月町の歴史的町並みに対して極めて大きな影響を与えた．1984年まで中山道は国道142号線として機能しており，佐久市と立科町を結ぶ主要路と位置付けられていた．こうした状況下，中山道沿いに立地する歴史的建造物は，老朽化に加えて自動車交通による振動に苦闘するようになった．それゆえ，とりわけ1970年代から1980年代前後にかけて，これら歴史的建造物の取り壊しや改築が目立つようになった.

しかしながら，1984年に国道142号線のバイパスと新望月トンネルが開通し，中山道の自動車交通量は大きく減少した．この頃より，建造物の２階に設置された格子や出桁造の軒，桝のみられる建造物が維持・管理され，保全されるようになった．これらは歴史的建造物保有者の日常生活に差し障りのない範囲内で維持・管理されており，彼らの宿場情緒に対する意識こそが保全の基盤となっている．また，同様の範囲内で宿場情緒を復元・再現する動きもみられ，たとえば建造物２階に改めて格子を装飾した例もある.

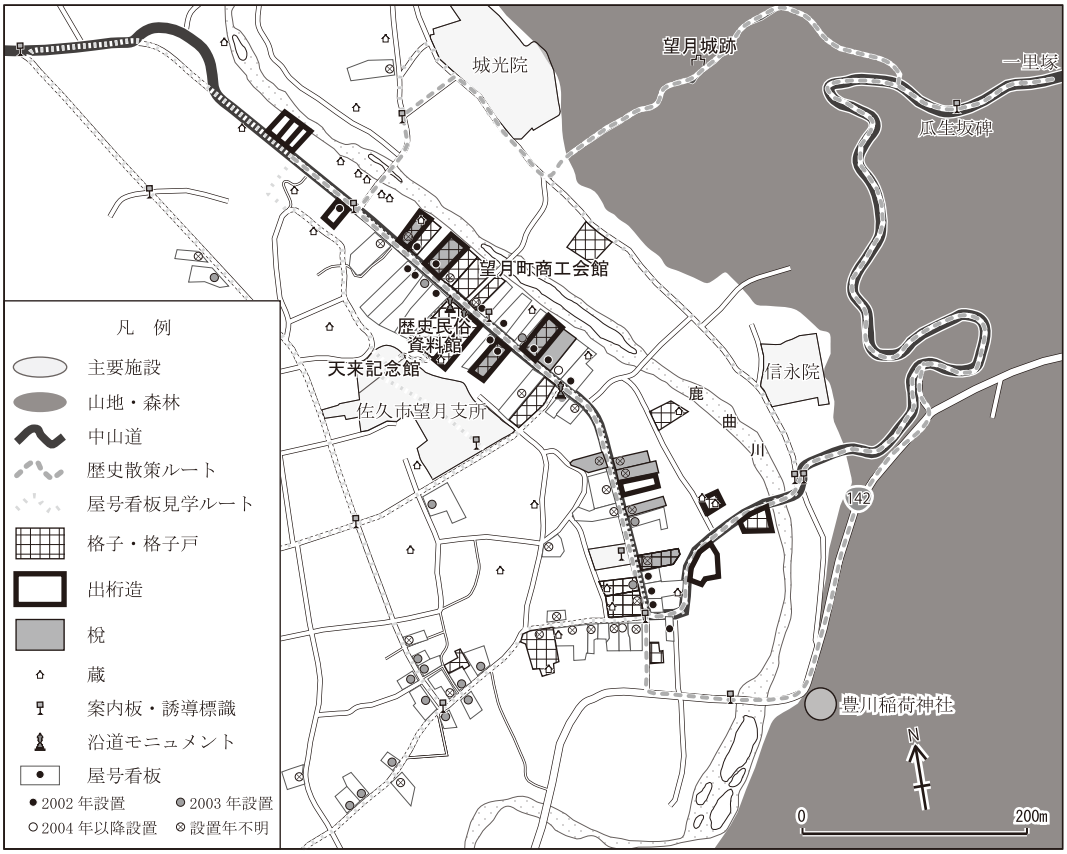
1990年代には，宿場情緒を偲ばせる建造物が新設されるようになり，これらの建造物は望月宿の歴史的町並みに順応した様式となっている. また，2000年代になると，屋号看板，沿道モニュメントや回遊ルートサインが望月宿をはじめ望月町内に設置されるようになった．その結果，望月宿の歴史的町並みには，格子や出桁造の軒，桝といった歴史的建造物保有者によって維持・管理されてきた景観要素と，住民組織や行政によって復元ないしは演出された景観要素の両者が存在し，そこには新旧複合的な景観要素による歴史的町並みが形成されている（第16図）.

現在，望月宿の歴史的町並みは，保全面だけでなく活用面，すなわち観光の対象としても位置付けられている．佐久市では望月宿の歴史的建造物や新たに創出された景観要素を観光資源として注目しており，これらを回遊することのできる観光ルートが整備されている．観光ルートは中山道，屋号看板，歴史散策の３パターンがあり，それぞれがテーマに沿った観光ルートであるものの，いずれも中山道沿いの歴史的町並みを包含するものとなっている．望月宿では佐久市の新たな観光の対象としてのまなざしを享受したことで，周囲の文化的資源を含む広域的な観光活用が試みられるようになった．その結果，望月宿の歴史的町並みは望月地区の広範を網羅した「観光資源」としての性格をも帯びるようになったと解釈できる.

一方で，望月宿では観光振興を図るための基盤が構築されてきたものの，それらを効果的に活用



第15図　望月宿における歴史的町並みの形成過程



第16図　望月宿における景観要素の諸相（2014年）

できているとは言い難い．その原因としては，次の３点が考えられる．第１に，これら複合的な景観要素を観光客に伝承するインタープリターがいない点である．望月宿のような町並み観光地や寺社観光地は，比較的代替可能な観光地である（溝尾，2001）．その場合，望月宿の歴史性や場所性をわかりやすく解説するインタープリターの存在が必要であり，望月宿における観光振興を担う人材の育成が急務と言える．

第２に，望月宿で活動する多様な主体の連携が不足している点である．望月宿には住民組織や多様な景観要素が存在し，国の重要文化財である真山家（大和屋）が江戸期の姿をほぼそのままにして保全されている．そして，歴史民俗資料館や天来記念館といった観光の拠点となりうる施設も充実していることから，望月宿は観光資源として高い潜在性を秘めていると判断できる．それゆえ，佐久市や望月町，望月町商工会，望月まちづくり研究会，歴史的建造物保有者など多様な主体間の連携を強化し，観光戦略における望月宿の位置づけを明確化することが課題であろう．

第３に，望月宿の保全・活用に対する行政による財政支援の不足が指摘できる．望月町をめぐる行政区分が度重なる市町村合併によって変化しており，歴史的建造物の維持・管理および資源化に向けた財政基盤が十分に構築できなかったことが考えられる．この点については，歴史的町並みの保全・活用に対して行政の介入が認められる立科町の取り組みに倣う点は大きいものと看取できよう．

Ⅵ　おわりに

本稿では，中山道望月宿の宿場町としての歴史的変遷に着目しつつ，歴史的建造物保有者の意思決定過程や住民組織および行政の取り組みを分析することより，望月宿の歴史的町並みの形成過程とその地域的特性について検討してきた．本研究で明らかになった知見は以下の通りである．

望月宿は河岸段丘上に形成された宿場町であり，その地形的条件から度重なる洪水被害に見舞われてきた．これにより，望月宿は移転・加宿を繰り返した特異な歴史的背景を有しており，他の宿場町にはみられない特有の宿駅構造が形成されてきた．さらに，江戸期中葉以降は頻発した火災によって建造物の大部分を焼失している．したがって，望月宿に現存する歴史的建造物のほとんどは江戸期中葉から末期にかけて改築もしくは新築されたものである．加えて，望月宿の歴史的建造物は施主の防災意識を色濃く反映したものとなっており，とりわけ中山道沿いにみられる桝はその典型である．

望月宿は都市の近代化を経験する中で，他の宿場町と同様にその歴史的町並みは淘汰されつつあった．しかしながら，地域住民は宿場情緒に対する郷愁と望月宿の近代化との間で葛藤しており，中山道をめぐる交通環境が変化する中で，日常生活に影響のない範囲で宿場情緒の維持・管理を試みるようになった．また，徐々にではあるが歴史的町並みの再現･復元も展開するようになり，歴史的建造物保有者による格子の再設置，審美性を意識した歴史民俗資料館や望月町商工会館の建築はその最たる例である．

望月宿の歴史的町並みは，「望月町」という旧来の自治体ではなく，合併後の佐久市や住民組織によるまなざしを受け，彼らが主体となってその整備や活用を進めてきた．望月まちづくり研究会は比田井天来の門流生の屋号看板製作という，他の宿場町では模倣することのできない望月町固有の景観要素を創出した．こうした状況下，佐久市は屋号看板や既存の文化的施設，望月宿の歴史的建造物を「観光資源」として活かすための観光ルートを整備した．その結果，望月宿には歴史的建造物保有者，住民組織，行政など多様な主体の意図･思惑を反映した，新旧複合的な景観要素の組み合わせによる歴史的町並みが形成されることになった．

本稿では重要伝統的建造物群保存地区に指定されておらず，かつ歴史的町並み保全運動が積極的に生じてこなかった望月宿を対象として，その歴史的町並みの形成過程や地域的特性について検討してきた．望月宿における歴史的町並みは，宿場情緒に対する歴史的建造物保有者の保全意識と，歴史的建造物や屋号看板などの景観要素を観光資源とみなして地域活性化を図ろうとした住民組織や行政の思惑とが基盤となっている．望月宿では，それらを表象化した多様な景観要素の混在する歴史的町並みが描かれてきた．望月宿の歴史的町並みは，そのほとんどがローカルな主体の営力によって形成されたものであり，地域住民の自発的な取り組みこそが歴史的町並み形成の原動力となっている．そのため，重要伝統的建造物群保存地区である大内宿や奈良井宿のように大規模な景観整備は行われておらず，それゆえ望月宿には非体系的かつ新旧複合的な景観要素による歴史的町並みが形成されてきた．しかしながら，このような不均質な歴史的町並みは，ほかの宿場町には見られない多様な景観要素の集合体であり，一種独特な地域性に富む歴史的町並みであるとも解釈できる．ただし，はじめに言及した通り，既往の研究ではローカルな主体が景観形成において重要な意味をもつ宿場町を題材とした実証研究は僅少であり，本稿で示した事例がどの程度の一般性を有するのかは不明瞭である．今後は望月宿と同一条件下にある宿場町の歴史的町並みとの比較検討が必要であり，歴史的町並み保全をめぐる現代的意味やその活用方策について，より幅広い視点からの議論が求められよう．

本稿の作成にあたって，佐久市役所建設部都市計画課の市川宏樹様をはじめとする皆様，佐久市立歴史民俗資料館館長の上原美次様，同学芸員の福島邦男様，NPO望月まちづくり研究会代表の竹内健治様，佐久市望月地区住民の皆様には大変お世話になりました．立科町教育委員会の山浦智城様と中山道26宿語り部の荻原昌介様には，芦田宿や中山道宿場町に関する貴重なお話を賜りました．土地利用図の製図に際しては，筑波大学技術職員の宮坂和人技官に依頼しました．末筆ながら厚く御礼申し上げます．

本稿の執筆に際しては，執筆者全員で現地調査を遂行した後，磯野がⅠ－１，Ⅲ－３－１），Ⅴ，Ⅵ，安村がⅡ，Ⅲ－３－５），Ⅳ－１－１），３），４），２，３，渡辺がⅠ－２，Ⅲ－１，２－１），２），３），３－２），４），６），梁がⅢ－２－４），３－３），曲がⅣ－１－２）をそれぞれ担当し，全体の調整は磯野が行った．なお，本研究を遂行するにあたり，平成26年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費25318，研究代表者：磯野　巧）の一部を使用した．

本稿の骨子は，日本地理学会2014年秋季学術大会（於富山大学）において報告した．

［注］

１）太田（1981）および孫ほか（2006）を参照．

２）1978年より全国町並み保存連盟によって開催されている．大橋ほか（2003）によると，開発によって歴史的町並みが徐々に淘汰される中，全国町並みゼミでは各地から町並み保全運動の関係者を集め，町並み保全運動に関する意見交換や町並みを活かしたまちづくりの方向性を議論することを目的としている．

３）歴史的建造物の集合体については「保存修景集落」や「伝統的町並み」など多様な呼称が散見されるが，本稿では小堀（1999）や丸山ほか（2008）に倣い，町並み保全を取り上げた先駆的研究である浅香・山村（1974）による「歴史的町並み」という呼称を便宜的に使用する．

４）望月宿には防火設備として桝がみられる．海野宿をはじめほかの宿場町と比較すると望月宿におけるその数は決して多くはないが，江戸期から明治期にかけて建設された古民家には桝が設置されている．

５）江戸時代から続く伝統的な商家の建築様式であり，建造物２階の軒が大きく前面に張り出した構造となっている．中山道沿いの宿場町にも特徴的な建築様式であり，和田宿や芦田宿にも数多く残存している．

６）本稿では中山道沿いの旧宿場町を「望月宿」，旧本牧町・旧布施村・旧春日村・旧協和村から成る旧望月町一帯を「望月町」，望月宿を含む望月町域の中心部を「望月地区」と呼称する．

７）望月宿や芦田宿は中山道の宿場として近在の集落を集めて宿駅を形成した．しかし，この両宿の中間に位置する茂田井村は900石を超す村高があった．また，名主の邸宅には藩の重役が止宿できる設備が必要であったことから，茂田井村に間の宿が設置されることとなった．

８）望月里民とは，作畑，金井原，樋ノ口，松岸平の地区に居住していた人々を指す．

９）脇本陣鷹野家提供資料による．

10）望月町が生んだ偉大な書家比田井天来の記念館建設の動きが起こったのは，「比田井天来先生生誕之地」碑が建設された1968年であった．これが具現化し，1974年に建設着工となり，1975年に全国初の博物館法に基づく書道専門の記念館である「天来記念館」が開館した（望月町誌編纂委員会編，1999）．なお，比田井天来の詳細は19）に詳しい．

11）丸山ほか（2008）によると，土造りおよび木造りの蔵は比較的建造年代が古く，コンクリート造りの蔵は比較的建造年代が新しい傾向にある．

12）火災によって遺構は焼失している．

13）完成年度は不明．

14）聞き取り調査による．

15）望月城は望月氏累代の居城であり，望月宿東方の丘陵上にある．望月城の北東には古代の「望月牧」であった御牧原があり，西方は急峻で鹿曲川に下り，城下には望月氏の菩提寺城光院がある．望月氏は東信濃に古代より強力な勢力を有していた滋野氏の一族で，1156（保元元）年の保元の乱に源義朝

の軍に属して活躍した望月重隆の頃より歴史に登場する．しかし，1543（天文12）年に武田晴信に攻められて落城した．

16）望月まちづくり研究会提供資料による．

17）佐久市佐久の先人検討委員会編（2014）によると，比田井天来は1872年に佐久市協和村で生誕した書道家であり，中国古典の用筆法を発見して現代書道の新しい潮流を築いた人物である．故郷をこよなく愛した人物であるとも言われており，1817（大正６）年に，郷里の母校協和小学科が火災に遭った際，屏風百双会の揮毫料の一部を校舎再建の費用として寄付した逸話がある．比田井天来は望月地区と非常に深いつながりがあり，望月地区や門流生の尽力から，1975年に天来記念館が設立され，また2006年には天来生家の裏山に天来自然公園が造られた．

18）2004年に設立されたNPO組織であり，望月町の伝統を継承しつつ佐久市全体に伝播させることを目的に活動を行っている．これまでに，望月の駒を歌う会，比田井天来小琴の顕彰，高齢者支援などに取り組んでいる．（佐久市市民活動サポートセンター　http://www.sakusapo.com/search/group.html?gid=18　最終閲覧日2014年９月24日）

19）まちづくり交付金事業の概要としては，本文で取り上げた基幹事業の他に，提案事業と事業活用調査の２点がある．提案事業は駒の里草競馬整備，特産品（土産品）開発，イベント研究および観光案内者育成，事業活用調査は事業効果分析業務が該当する．提案事業および事業活用調査については本研究の趣旨と直接的な関係が薄いため，本文では言及していない．

20）経営コンサルタント企業は入札によって選定している．

21）望月町誌編纂委員会編（1999）を参照．

［文　献］

浅香幸雄・山村順次編（1974）：『観光地理学』大明堂．

阿部弘道・石井　昭・篠　伊知郎（1986）：旧中山道信濃諸宿における「出梁造」の民家について．日本建築学会大会学術講演梗概集，**1986**，795-796.

大島規江（2004）：伝統的建造物群保存地区における歴史的景観の変容　－長野県楢川村奈良井を事例として－．日本建築学会計画系論文集，**581**，61-66.

大島規江（2005）：伝統的建造物群保存地区における町並み保存に対する住民意識　－長野県楢川村奈良井を事例として－．日本建築学会計画系論文集，**590**，81-85.

太田博太郎（1981）：歴史的町並みの総点検．環境文化，**50**，1-3.

大橋智美･和泉貴士･小田宏信･斎藤　功（2003）：製紙都市須坂における歴史的景観の保全．地域調査報告，**25**，47-70.

織田雪江（1997）：「中山道の宿場町」を景観整備に生かす．浮田典良編：『地域文化を生きる』大明堂，165-187.

兼子　純・新名阿津子・安河内智之・吉田　亮（2004）：古河市における中心市街地の変容と都市観光への取り組み．地域調査報告，**26**，123-150.

小島大輔・中村裕子・久保倫子・呉羽正昭（2005）：下諏訪宿の機能および景観の変化．地域研究年報，**27**，19-40.

小堀貴亮（1999）：佐原における歴史的町並みの形成と保存の現状．歴史地理学，**41**(4)，21-34.

佐久市佐久の先人検討委員会編（2014）：『佐久の先人』佐久市・佐久市教育委員会．

孫　鏞勳・下村彰男・浜　秦一（2006）：下郷町大内宿における集落景観の認識に関わるオモテの景観構造の特徴に関する研究．ランドスケープ研究，**69**，717-720.

淡野寧彦・呉羽正昭（2006）：茨城県桜川市真壁町における町並み保全活動と地域活性化．茨城地理，**7**，21-36.

中尾千明（2006）：歴史的町並み保存地区における住民意識　－福島県下郷町大内宿を事例に－．歴史地理学，**48**(1)，18-34.

橋本暁子・斎藤譲司・亀川星二・西田あゆみ・津田憲吾・井口　梓・松井圭介（2010）：成田山新勝寺門前町における街並み整備と商業空間の変容．地域研究年報，**32**，1-41.
久　隆浩（2001）：歴史的まちなみ保存の現代的意義．都市研究，**1**，73-78.
福田珠己（1996）：赤瓦は何を語るか　－沖縄県八重山諸島竹富島における町並み保存運動－．地理学評論，**69A**，727-743.
丸山美沙子・水谷千亜紀・小島大輔・山崎恭子・長坂幸俊・ブランドン＝マナロ＝ヴィスタ・星　政臣・吉田　亮・松井圭介（2008）：地域資源としての歴史的建造物の利用とその課題　－茨城県筑西市下館地域を事例として－．地域研究年報，**30**，109-141.
溝尾良隆・菅原由美子（2000）：川越市一番街商店街地域における商業振興と町並み保全．人文地理，**52**，84-99.
溝尾良隆（2001）：観光地と観光資源．岡本伸之編：『観光学入門　ポスト・マスツーリズムの観光学』有斐閣アルマ，119-140.
望月町誌編纂委員会編（1997）：『望月町誌　第四巻　近世編』望月町.
望月町誌編纂委員会編（1999）：『望月町誌　第五巻　近現代編』望月町.
望月歴史民俗資料館編（2007）：『街道文化　佐久の中山道宿場展』佐久市教育委員会.
八橋倫子（1976）：起宿の歴史地理学的研究．新地理，**1**，13-32.

Forming Process of Historical Landscape in Mochizuki Post Town on the Nakasen-do

ISONO Takumi, YASUMURA Kensuke,
WATANABE Ryosuke, LIANG Zhenwu and QU Yuhang

Keywords: historical landscape, inhabitant consciousness, regional development, Mochizuki post town, Saku City

This study describes the forming process of historical landscape in Mochizuki post town on the Nakasen-do through an analysis of the inhabitants' consciousness with regard to the conservation of historical buildings, spatial distribution of the landscape elements, and the actual situation of regional development by local residents and the local government in the regional context.

The daimyo feudal lords' working system resulted in an increase in the number of visitors to the post town; this led to the construction of Mochizuki Shinmachi on the right bank of the Kakuma River. However, typhoon-fed flooding of the Kakuma River took a heavy toll on Mochizuki post town, especially on Mochizuki Shinmachi. This led to Mochizuki Shinmachi being moved to the south of Mochizuki Post Station, on the left bank of the Kakuma River; this forced a change in the route of the Nakasen-do. The structure of Mochizuki post station, hence, has been influenced by flood and fire, and the landscape reflects the history of these disasters.

Local residents either rebuilt or tore down their houses with historical landscape elements during the Showa Era by changing their living environments. However, they could not reconcile the nostalgia of living in the post town and modernization of Mochizuki town. Under the circumstances, in the 1980s, the people attempted the recreate the post town to the extent possible so that their daily lives would not be affected, in order to improve the condition of traffic on the Nakasen-do. Furthermore, in the 1990s, the local government constructed new public buildings that were in line with the historical landscape along the Nakasen-do.

The historical landscape of Mochizuki post town has been generated and utilized not by Mochizuki town, but by a residential organization, after the merger with Saku City. Specifically, a residential organization created a number of house name signs, written by a school of *Hidai Tenrai*, which comprise elements from the new landscape and make the most of Mochizuki town's originality. The historical landscape of Mochizuki post town is comprised of a combination of multiple old-and-new landscape elements: the old elements include the partial operation and maintenance of historical buildings by the owners; the new elements include the creation of new landscape elements by a residential organization and the local government.